イベントについて

子ども達の経験を増やす機会として、月に1回以上のイベントを開催しました。スタッフからの意見により決めたイベントもありますが、「梅仕事」は、梅の実を寄付するので子ども達に「梅仕事」体験させませんか？と地域の方からの提案を実行したものです。「梅仕事」に子ども達は興味を示しませんでしたが、地域の高齢者の方が興味を持たれ、子ども達と一緒に作る事ができ、できたシロップで子ども達はジュースやかき氷を楽しみました。

キッチンカーで出店した地域のイベント「OSOTO　FES」では、不登校児童2名がお手伝いに入ってくれ、看板を書いてくれたり、ひだまりのチラシを配布してくれたりしました。その後も食育のイベントや、餅つきでは、中学生たちは運営のお手伝いの方にまわってくれるようになり、のちに保護者から、受験の際の作文にひだまりでの事が生き生きと書いてあったと聞きました。ひだまりでのイベントが体験で終わるのではなく、経験として蓄積されていったのは、とてもうれしい事例でした。

女性スタッフばかりの運営で、イベント時にはどうしても男性の協力が必要な時もありましたが、地域の方に声をかけると快く協力してくださいました。子ども達の「そうめん流しをしたい」「水鉄砲大会をしたい」「競技かるたをしたい」という呟きにも、地域の方がボランティアとして協力して頂き、子ども達の「やりたい」が次々に実現していきました。ラフティングでは、川の学習から水害後の復旧の様子も見ることができました。また、高い所から飛ぶアトラクションでは、初めから飛ばないと決めた子、友人達の前で頑張った子、チャレンジするも飛べなかった子、それぞれが自分自身の事を知るきっかけとなり、その後の進路にも多少影響したイベントとなりました。

ひだまりでできる体験

手芸クラブ（金曜）

ウンスンカルタ

おやつづくり

かるた部（水曜）

折り紙教室（金曜）

らくがき

ひだまりでいつでもできること

ひだまりでは3時に手作りのおやつがでます。興味があったら、一緒に作る事もできます。ひだまりに慣れて来ると、自分なりのひだまりでの役割がほしくなるようです。「暇だからなんか手伝うことない？」という声が沢山聞かれました。ホットケーキミックスや、白玉粉は常に準備しています。簡単に失敗の少ないおやつができるからです。ホットケーキはとても上手になりました。作りすぎて食べれない時もありました。たこ焼きを4日連続でやったこともあります。パエリアを自分で説明を読んで作ってもらったこともありました。ひだまりでは、誰かと一緒に食べるという事も意識しました。嫌いなものを堂々と宣言する子もいます。その日のおやつがその嫌いなものだった子の為に、その子が来る時間までに慌てて別のおやつを用意したこともありました。毎日、来る子の事を思いながらスタッフが作ってくれたおやつや食事を子ども達はお腹いっぱい食べています。「ここのおにぎりが一番すき。ぎゅっとにぎってあるおにぎりは、愛情を感じるもん」という子や、「やったー、今日は全部俺の好きなやつやん」と大喜びする子ども。食欲のあるなしで、その子の様子を知ることもありました。何かモヤモヤする事があった時には、一切食べなかったり、おやつに文句をつけたり。次の日、おやつを沢山食べる姿を見て、安心することもありました。

折り紙は金曜日ボランティアの方が来てくださいます。教えるのではなく、季節の物を折って下さってます。そこに興味がある子がちょこんと座ると「折ってみる？」と教えてくださり、次々に作品が出来上がります。

12月には、大量のサンタクロースができたので、町内の公民館に寄付しに行きました。折り紙のボランティアさんに習いたくて、大人の方も金曜日には来られます。参加されてる方の中に裁縫が得意な方がいると分かると「私も裁縫好き」という子から「手芸くらぶ」が発足しました。金曜日は、折り紙教室と手芸クラブで賑やかなひだまりになりました。

スタッフの中に百人一首の経験者がいて、「子ども達に競技かるたを教えたい」と企画しました。すると、「やりたい」という小学生が4名揃い、「かるた部」ができました。基礎からしっかり教えてもらい、春休みには、午前中の静かなうちにかるたの練習もしました。かるたを通して、1人1人の意外な一面をみることができるようになりました。

1年を振り返って

子ども達の為に、おやつや食事を作る毎日でした。「美味しくない」「機嫌が悪いから話しかけないで」と言われた日もありました。そう言いながらも、中学生の子ども達は毎日、毎日、学校が終わると急いで家に帰り、着替えてひだまりに来ました。1人の居場所から、2人居場所、初めは友達の姿が見えないと1人では入りづらく帰っていた子どもも、全員1人でも入れるようになり、俺たちの居場所になりました。中学生の居場所になった事で思いがけない効果がありました。それは、自転車です。中学生は全員自転車で居場所に来ていました。開所初めに挨拶に行った関係機関の方々は、居場所の前を車で通るたびに気にして下さってて、沢山の自転車が停まってるのをみて、「本当に良い居場所になっているんだな」と感じてくれたそうです。学校の時間に停まってる自転車があると「不登校の子が今日は2人来てるようだ」とか、「あれ、今日は少ない。おー、今日は多いな、なにかあるのかな？」と通るのが楽しみだと話す近所の方もいらっしゃいました。思いがけない効果でした。

また、困難を抱えた子どもが元気になってくると、何か自分にもできることがあるのではと動き出してくれる大人が増えることもわかりました。不登校の子が学校に行けるようになり、やりたい事を話し始めると、ついつい協力したい気持ちになり、自分にできる事で精一杯応援したくなるようです。不登校2人の高校合格は、連携せずともその子を支えたいと思った複数の大人による結果も大きいと思います。

その子が何に生きづらさを感じているのかを知り、少しでもそれを取り除き解決できると、子どもは驚くほどの成長を見せてくれました。そして、子ども達を一緒に育てたいと思って下さる地域の方がどんどん増えています。私達スタッフは、今できることをやり、できないことは誰かに頼る！そう割り切って、行政に頼り、近所の方に頼った1年でした。